

古河電工産業電線の販売銅量

21年度 2割増目指す

営業利益は黒字転換へ

古河電工産業電線（本社・東京都荒川区、社長・白坂有生氏）は2021年度の販売銅量を前年度比2割増の1万2千トを目指す。建設用電線など汎用線

事業での販売量は前年度水準からは需要が改善するとして増加。機能線事業では配電盤内配線などに使う可とう性難燃ポリエチレンケーブル（LMFC）な

どが増える。売
上高も同約2割増の2
10億円が目標。販売
量・金額とも19年度水
準までは回復はしない
が、生産効率化や収益
重視の販売で営業黒字

に転換させる。

20年度の見込値は販売銅量が同4割減の1万ト強で、売上高は同3割減の約180億円。汎用線事業では新型コロナウイルス感染症拡大などの影響から主力製品の建設用電線の販売が減少している。機能線事業ではデータセンターや船舶関連など個別案件ごとにカスタマイズして納入するゴム絶縁電線は比較的堅調。一方で電気機器

や工作機械、配電盤関連の電線ではニーズが減った。販売減などの影響から営業損益は赤字を見込んでいます。

21年度については汎用線事業では新型コロナウイルスの影響が一段落し企業活動などが正常化することや、大阪・関西万博関連などの大型プロジェクトでの需要を期待。注力製品のアルミ電線については高施工性のメリットが浸透し大きく増えるの見込

む。機能線事業については電気機器や工作機械向けは本格的な回復に時間を要するが、建設関連市場の改善を受けて配電盤向けのLMFCが徐々に増加すると見通している。

販売数量はコロナ前の19年度を下回るものの収益改善に向けて生産効率化や収益重視の営業に加えて、技術開発への注力による製品力や付加価値の向上にも引き続き取り組む。

